



01 農業を追いかけ続けて

大澤さんは深谷市の出身。サラリーマン家庭で育ちましたが、手に職をつける仕事をしたい、という思いから、農業高校に進学し、卒業と同時に埼玉県農業大学校で学びました。

宮代町との縁は20歳の時。杉戸町に住む先輩から、オープンしたばかりの「新しい村」に誘われたことがキッカケでした。「新しい村」では野菜の育苗や生産を担当、いわば農業の修行時代です。

10年後、「新しい村」を退社し、町が主催する「農業担い手塾」に参加しました。大澤さんにとっての転期になりましたが、給付制度や指導農家などのサポートもあり、3年後には卒業し「農家」になりました。

それから6年、今では畑と5棟のハウス、あわせて1.2ヘクター

ル以上で野菜苗と野菜を生産しています。野菜苗は春に25種類、秋に18種類、野菜は1年をとおしてミニトマトやパプリカを、冬にはキャベツを栽培し「新しい村」やスーパーなどに出荷しています。

最近はず宮東に農家住宅を購入し、自宅として建て替えました。敷地内には農業に利用できる既存の倉庫もあります。

現在41歳、結婚し子どもは3人です。子どもたちは土いじりが好きで、ポットの土入れ作業を一生懸命手伝ってくれるそうです。

岐路に立たされることもあったが、すべてはいい経験になっている、と大澤さん。「農業をやめようと思ったことはなかった、性に合っているんですよ」と笑いながら振り返ってくれました。

新しい世代の農業者たち

今、宮代町では、新しい世代の皆さんが、さまざまな形で農業を職業としています。代々の農家を継ぐ、新しく農業を始める、農業法人で働くなど様々です。今回はそんな皆さんを紹介します。



■大澤さんは今、町の学校給食にパプリカを出荷しています。今は一部ですが、「将来は全量出荷できるくらいになりたい」と意欲的です。

02 営業マンから農業の世界へ

56歳の伊藤さんは現在、宮代町内でアパート暮らしをしながら、「農業担い手塾」で研修中です。前の住まいは川口市、奥さんとは、離ればなれの生活です。

全国をとびまわる営業マンだった伊藤さんは50歳を過ぎた頃、人生の次のステージは農業、一つの場所に根をはりたい、と思うようになりました。

1年間、民間の農業大学校で学び、農業を職業とする決意を固めました。令和3年3月に会社を退職し、宮代町の「農業担い手塾」の門を叩きました。

「入塾前研修」として、大澤さん(左記事)のもとで実践経験を積むかたわら、県内農家で働いたり、独学で本を読んだり、動画を見たりと大変な勉強家です。

昨年、「農業担い手塾」に入っ

た伊藤さんは、現在、指導農家となった大澤さんのもとで実践研修中ですが、すでに0.7ヘクタールほどの畑で野菜を栽培しています。収穫した野菜を「新しい村」やスーパーなどに出荷する毎日です。

一年前、植えたばかりの野菜が降ひょう被害で「ほぼ全滅」した時は、「かなり、落ち込んだ」そうです。しかし、新規就農した先輩たちが、すぐに苗を手配し、新しく植え直している姿を見て、伊藤さんも苗を植え直したといいます。

宮代町は新規就農した先輩たちも多いので、「成功例だけでなく失敗例も教えてもらえる、そんなところが、良いところだ」伊藤さんはそう感じています。



■ 塾生は町が用意した「農業担い手塾研修圃場」で実践的な農業に取り組みます。



農業担い手塾

「農業担い手塾」は平成22年から実施している宮代町独自の実践的な研修制度です。農業を職業として選択したいと志す人を3年間かけて支援します。塾生は指導農家から技術的な指導を受けながら、実践的に学んでいきます。

現在9名の「農業担い手塾」修了生が町内の畑10ヘクタールで農業に従事しています。彼らの野菜は「新しい村」や町内のスーパーなどで見つけることができます。

問 農業振興担当
34・1111 内線262



■ 日々、試行錯誤の連続ですよ、と作物を見ながら話す伊藤さん。

03 「村育ち」をつくる



「新しい村」アグリ生産課で働いている平田さん、加藤さん、齋藤さんは西原地区の1ヘクタール以上の農地で野菜を作っています。3人とも町外から通勤しています。

もともと、おもちゃ業界に勤めていた加藤さんは、ここでは3年目。種をまいて、芽が出て、日々、苗が育っていく様子を見るのは、とても楽しいといいます。

3年目の平田さん、5年目の齋藤さんは、それぞれ埼玉県農業大学校を卒業後、他の業種で働いていたこともありますが、最終的には農業を選択しました。3人とも、ここでは自分たちの裁量のできる部分が多いので、そこが気に入っている、と話します。

外仕事は暑さや雨風など、大変なことも多いのでは、とたずねたところ、「自分たちが栽培した

ものを、おいしく食べてもらいたい、という思いの方が勝るから大変だと感じたことはない」と話します。

「あまくて、おいしかったよ」と直接、声をかけてもらえた時にはやりがいを感じるそうです。

彼女たちが5月に手作業で植えたり、種を蒔いたのは、トウモロコシが1万2千、枝豆が2万5千、サツマイモが4千5百です。

収穫したものは「新しい村」で「村育ち」という名前で販売します。また、近隣のスーパーなどにも出荷します。

この記事が出る頃には「新しい村」で「村育ち」の名前がついたトウモロコシや枝豆を見かけるかもしれません。

ぜひ彼女たちを思い出してください。

■「新しい村」では20ヘクタールの水田、1.2ヘクタールの畑を耕作しています。収穫した米、野菜ともに「村育ち」というブランドで、新しい村の直売所「結」で販売しています。上写真は「新しい村」アグリ生産課による田植えの様子。



■「新しい村」では水稻苗を3万枚生産し、町内外の農家に販売しています。田植え後の宮代町に広がる緑の風景は、「新しい村」が作った苗によって「描かれて」いるのです。



■左から順に平田さん、加藤さん、齋藤さん。田植え前の時期に水稻苗の生産を手伝うのも彼女たちの仕事です。



■自宅前のビニールハウスではきゅうり、トマトを栽培しています。朝と夕方1日2回収穫するそうです。

新しい世代の 農業者たち

04 花と野菜の3代目

祖父の時代に現在のようなハウス栽培の農業をはじめてから3代目になる高橋さん。現在は、お父さんとともに字中島の農業用ハウスで大規模に花を栽培するとともに、きゅうりやトマト、露路野菜では、キャベツやブロッコリーなども栽培しています。

父や祖父が専業農家として働く姿を見ているので、農業を一生の職業とすることを自然に受け入れた、といいます。

大学を卒業後、加須市にある「花き市場」で働いた後、高崎市の花農家でも修行しました。パンジーや日々草などの花は市場出荷をし、加須、東京に運んでいるそうです。

野菜は「新しい村」やスーパーなどに出荷しています。

農業は時間も拘束されるし、天候にも左右される、かといって

極端に利益がでるような仕事でもありませんが、棚に並べた自分の野菜がなくなっているのを見ると、とても嬉しいといいます。どんな人が買ってくれているのかな、と考えるそうです。

「高橋園芸」という名で棚に野菜を置いているので、手は抜けない、といいます。

現在、「新しい村」生産者組合の野菜部会長。生産者仲間と毎月第2土曜日に「生産者土曜日」を開催し、対面販売を続けています。

お客さんが直接、野菜を選んだり、感想を言ってくれた時は励みになるといいます。

「自分が作ったものを選んでもらうのだから、手は抜けない、そんな気持ちで野菜と向き合っている」高橋さんは、そう話します。

農のあるまちづくり

宮代町独特の景観は田んぼや畑などによって形成されています。農家が農地を耕作することによって、この風景は維持されてきましたが、近年では農業離れが進み、耕作されない農地も増えました。

こうした背景もあり、宮代町では「農のあるまちづくり」基本計画を策定し、平成13年から「新しい村」をその拠点施設としてオープン。「新しい村」による稲苗の販売や耕作の受託による農家の支援をはじめました。また、宮代町で新規就農を目指す皆さんをさまざまな形で支援しています。



■ハウスの中では1000本以上のきゅうりが栽培されています。「シャキシャキ」という音が聞こえます。